

封建的危機と「黄金のプラハ」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 進藤, 牧郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23994

封建的危機と「黄金のプラハ」

進 藤 牧 郎

とうとう定年を迎えることになってしまいました。1951年に金沢に赴任してから40年近くになってしまったわけです。本当に長い間、いろいろ皆様様へ御世話様になり、すっかり甘えて、御迷惑をおかけしましたことなど、お詫びするとともに、心から厚く御礼申し上げます。どうも有難うございました。

今日は1時間ということで、何か話をということなので、いろいろ考えましたが、今の時代と絡わり合うことで、しかも多少は、私のやってきた学問の分野にも関連しそうなテーマを選んでみました。

題して「封建的危機と黄金のプラハ」です。封建的危機といわれる時代に何故にプラハは繁栄の時代を迎えたのでしょうか。

戦争が終って、敗戦の中で、沢山の友人たちを失って、生き残った私たちに、「何ができるのか？」それは「天皇の名のもとに」沢山の日本人、それ以上に、その数十倍にも亘る人びとの命を奪った「戦争」、具体的には「日中15年戦争」とかさなって「第二次世界大戦」という「戦争」の惨禍を、二度と、否、永遠に繰り返してはならない。そうはいつでも「私に何ができるのか」。実は中高の教師になって、若いこれからの世代の人びとに反戦平和の論理と歴史を、分り易く、心の奥底に残るように、全力を尽くしてみようと思ったのです。

でも戦後3年間、大学で勉強しているうちに、好きな歴史学のなかでもできるのでは、という諸先生の甘言にのせられて、余り勉強の好きでない私が、こんな道を歩んでしまいました。まったく汗顔の至りです。

40年余り前、私たちにとって、敗戦後の日本という世界に、夢のように描いた世界は、暗澹な「天皇制の世界」ではない、本当に明るい民主主義的な

「近代」の世界でした。そして「大塚史学」は、私にとって、やはり一つの導きの糸であったといえましょう。それでも、封建社会から近代社会への移行、いわば「自由な資本主義、その上に立つ近代社会」という発想には、ちょっと異和感がなかったとはいえません。すでにファシズムとの戦いを経験してしまった「資本主義社会」は、否応なしに独占の段階にあったのですから。世界史が、すでにファシズムを知って、世界の人びとが、この残虐さを体験し、これと戦い、レジスタンスのなかで、民族の解放と民主主義の勝利を勝ち取りました。しかし、何千万の生命ばかりでなく、それに数十倍もするという戦争の犠牲者を出していました。これ以上の犠牲者の増大を救うためとはいえ、人類が「原子爆弾」を知ってしまった、そのもとでの「近代とは何か」を私たちは問わねばならなかったわけです。たしかに終戦の時には、1929年以來戦争にまで行きついてしまった「資本主義の危機」について、世界中の歴史家、あるいは経済史家たちは、封建制から資本主義への移行、とくに「封建的危機の時代」を問題に取り上げていました。私の学問に入ったころの最初の問題意識は、その後の研究の「原点」でもあったといえましょうか。

40年以上経って、日本が経済大国として、その繁栄をいつている時、世界の経済史家たちによって、今また、勿論別の視角からですが、この「封建的危機の時代」が取り上げられているのをみますと、決して、「歴史は繰り返す」という意味ではありませんが、何か一つ世代が変わったな、1930年代から第二次世界大戦のころの危機感とは違った意味で、この資本主義社会も、さらには現実の社会主義社会をも加えて、もう一度、社会の、いわば構造的な危機に直面しているのではないか、と思うようになっていくのです。たとえば、資本主義社会における国民経済と多国籍企業の経済学。「国民国家」の枠に閉じ込められた「国際政治、国際外交」。どうも時代は私たちより先行しているようです。そうは思いませんか。

戦後学部での最初の講義は今井登志喜先生の『近代における繁栄中心の移動』でした。たとえば最近のベスト・セラーの一つ、ポール・ケネディの『大国の興亡』とか、最近流行の社会史のなかでは、読みごたえのあるフェルナン・ブローデルの『物質文明・経済・資本主義』など、40年余り前の講義では、都市が中心でしたが、都市と国家の違いはあっても、今はいわば「覇

権大国の興亡史」です。そのなかで、もう一度14世紀以来の、広い意味で「封建的危機の時代」、別の言い方をすれば「資本主義の成立の時代」が取り上げられ、しかもそのなかでは資本主義の「衰退の時代」が予測されているのを感じられるのではありませんか。従来の世界史では、常に「発展の歴史」しか取り上げてきませんでした。しかし、私には「発展」の裏に、沢山の「停滞」や「衰亡」の歴史があったように思います。世界史の舞台に登場する数少ない「民族・国民・国家」のほかに、貧困と飢餓に打ちひしがれた、多数のびと、停滞のなかに沈潜している「民族・国民・国家」も、この地球上には沢山存在しているという事実を目をつぶるわけにはいかないのです。こんな思いを持ちながら、従来の歴史学ばかりでなく、経済学さえもが、ことに「国民経済」を所与の前提とするかぎり、これで良いのかな、と思わざるを得ません。そこで今日は、あらためて、「封建的危機の時代」とくにチェコ人の国ボヘミア「黄金のプラハ」と呼ばれた14世紀「封建的危機の時代」に目を向けてみようと思うのです。13世紀後半のいわゆる「ドイツの大空時代1254~73」の後、ハプスブルク家のルードルフⅠ世が皇帝に選挙されたことは御存じだと思いますが、その最も強力な対立候補がチェコ民族王朝のプシェミスル=オタカルⅡ世であったことはあまり知られていないようです。当時のボヘミア王国は、北はバルト海から南はアドリア海までの東欧の大国。1241年モンゴルのためにリーゲニッツの戦いで、ヨーロッパ連合軍が惨敗したにもかかわらず、幸いにもモンゴル軍が撤退した後の東欧世界を、事実上支配し、しかもモンゴルの劫略を免かれた豊かなボヘミアを拠点に、神聖ローマ帝国全域にまで強い影響力をもっていました。しかしオタカルⅡ世の強大化を恐れたドイツ諸侯や教皇さえもが強硬に反対して「貧しき伯爵」ハプスブルク家のルードルフを皇帝に選んだわけです。

でもハプスブルク家は決して「貧しき伯爵」ではありませんでした。ヨーロッパの十字路にあって「金持ちグントラム」の国でもありました。なるほどドイツ諸侯の反対にあって皇帝位は、1438年まで、持続して維持することはできませんでしたが、ハプスブルク家もまた豊かなボヘミア王国への野心をあきらめていたわけではありません。しかしこの王国は、1346年にはルクセンブルク家に帰してしまいました。ボヘミア王としてはカレルⅠ世、ドイ

ツ皇帝としてはカールⅣ世の時、ルクセンブルク家の首都プラハは、「黄金のプラハ」と呼ばれる繁栄の時代を迎えました。「百塔の街」といわれるように、ゴシックの尖塔が建ち並び、神聖ローマ帝国では最初の大学、今のカレル大学が1348年創設されたばかりでなく、当時のヨーロッパでは、おそらく最大規模の「都市計画」が実現しています。

プラハには2つの城塞がありました。その1つがヴルタヴァ川をその南から扼するヴィシェフラート城と、もう1つがヴルタヴァ川の北、レトナの丘の上に築かれたフラチャニ城です。ともにチェコ民族の古代伝説のなかに現れていますが、フラチャニ城にチェコの最初の民族王朝プシェミスル朝が君臨するようになると、その丘の下に、いわば城下町としてマラー・ストラナが開け、ヴルタヴァ川を挟んで、おそらくはいわゆる河川敷の湿地帯に、古くからユダヤ人が定住し、これを核として商人や手工業者の町、スタレー・ムニェスト（旧市街）が生まれていました。この2つの街を結びつける「カレル橋」はプラハの町の象徴だったともいえましょう。この旧市街を取り囲み、さらに南のヴィシェフラート城に結びつけるように、カレルⅠ世は、新しい街、ノヴェー・ムニェストを建設したのです。この広大な街並を見おろすように王城フラチャニ城も整備され、華やかな宮廷文化の花が咲きました。今もプラハの東南十数キロのところにあるカルルシュティン城には、カレルⅠ世時代の宝物類を保存し、その文化の豪華さを残しています。先駆的な人文主義者のペトルルカをはじめ、ヨーロッパの各地から多くの人文主義者たちが、このプラハを訪れています。

たしかにこの繁栄の基礎にはクトナー＝ホラの銀が挙げられています。すべての河川がヴルタヴァ川に集って、つくりだす肥沃な平野部。それを四方から包む周囲の山々には豊富な鉱山資源が満ち溢れていました。それでも、チェコスロバキアの歴史家フランチシェク・カフカによれば、ボヘミアの繁栄の基礎は、農業の発展であり、13世紀以来、家畜数の増大、畜力利用の一般化、鉄製犁の普及、その結果としての三圃制農法の一般的導入。耕地は、放牧地や山林を犠牲にして拡大し、チェコ人農民の不足を補って、とくにドイツと国境地域にはドイツ人による植民が進み、「ドイツ人の権利」と呼ばれた世襲小作権の基礎の上に、新らしい、より自由な農民と貴族領主との関係

が形成されてきた。カフカは、このことを条件に生産物の商品化も進み、商業の可能性も生まれて、農民の給付する賦役と現物貢租は貨幣給付にとって代わることになる、というのです。

このようなカフカの見解には疑義を感じる方も多いと思います。従来からの見解では、三圃制農法の導入は、古典荘園制、本来的な農奴制形成の条件、自給自足的な村落共同体の形成の条件であって、賦役あるいは現物地代の金納化の条件とは考えられていませんでした。いわゆる「大開墾時代」ドイツ人の「東方植民」そして「中世農奴解放」は、封建社会の「構造転換」としてしか理解できなかったのです。勿論、たとえば上原専禄先生のヴィーン近郊のクロスターノイブルク修道院における貨幣地代の例や有名なコスミンスキーのイギリス西北部における金納化の例もあります。それでも、いわばエルベ以東の後進地帯に属すると考えられてきたボヘミアで13~14世紀に金納化が言われることには、私も正直のところ、驚いてしまいました。でもチェコの歴史家が言うのですから、あるいは本当かもしれないぞ、とも考えました。

三圃制村落は、従来考えられているように、本当に「自給自足の経済」の核なのか。そうではなくて、専門の「主穀作物生産」の、当時としては最も効率的・合理的な経営方式＝三圃制村落共同体だったのではないか。そうすると、耕地拡大の犠牲になった放牧地や山林から追われた牧畜はどうなったであろう。三圃制の普及以前には、殆ど労働力を使うことなしに、共有地で役畜以外の家畜、たとえばブタばかりでなく、ヒツジ・ヤギなどを飼養できました。しかし三圃制村落が形成されるようになると、役畜以外の牧畜は村落から離れ、耕地には適さない山間部に追われてしまいます。『アルプスの少女』ハイジにあるような、いわゆる「アルム経済」別の言い方をすれば、三圃制村落の主穀生産と山間部の牧畜とに専門化が強いられ、農牧分業という「社会的分業」が始まるし、同時にいわば「農牧兼業民」のなかから、土地を離れる人びともを創り出していくことにもなるでしょう。ハプスブルク家発祥の地スイスの「原三州」で、いち早く1291年以来、「反乱」が起った理由の一つは、ここにありました。ボヘミアでも、スイスや西ヨーロッパの先進地帯に負けないくらいに、同じような条件が、歴史的には準備されていた

ように思われます。

カフカも13世紀のボヘミアでは、この農業生産力の向上に対応して、50以上の小都市が簇生し、銀鉱、とくにクトナー＝ホラの銀山の開発が急速に進み、地方市場が展開する。そうしたなかで、事実上の農奴解放、地代の金納化も進んだ。そして13世紀のボヘミアにあっても、当時ヨーロッパでは最も先進的であったネーデルランド・フランドル・北イタリアーに比肩する都市網を形成していた、というわけです。

いわゆる「封建的危機論争」では、14世紀に入ると、停滞期を迎えるときれ、西ヨーロッパでは「英仏百年戦争」が始まり、長い戦乱のなかで、農村ばかりでなく、成長しつつあった小都市もまた荒廃するに至ります。しかし豊かなボヘミアでは事情が、少し違っていました。

最初にボヘミア王に選ばれたルクセンブルク家のヨーハンは、1346年クレシーの戦いで戦死しますが、彼はこの王国を、単なる収入源としか思っていないませんでした。したがって即位に際してボヘミア貴族たちの特権を、いわゆるマグナ・カルタの形で認めています。この貴族たちの台頭は、すでに13世紀後半の段階で、プシエミスル＝オタカルII世がハプスブルク家のルードルフに敗れた重要な原因でもありました。ことにボヘミアの有力な貴族たちが、オタカルの王権がより強大になるのを恐れて、ハプスブルク家のルードルフの側についたからでもあったのでした。

こうした貴族たちが、自分たちの特権を維持するために、ルクセンブルク家のヨーハンをボヘミア王に選んでいたわけです。ヨーハンの子、カレルI世は、その母エリシュカがチェコ民族王朝を直接継承する王女だったこともあって、王国を留守にして戦いにあけくれていた父王とは違っていました。それでもボヘミア貴族とくにチェコ人貴族たちの特権を認めないわけにはいきませんでした。しかも戦禍を免かれ、クトナー＝ホラの銀に助けられた、この豊かなボヘミア王国を基盤に、皇帝になると、プラハは、実質的に帝国の首都となり、先にも述べましたように、いわば「都市計画」を実現し、フラチャニ城も、帝国の王城にふさわしく、ゴシック風に整備・建設されたわけです。しかしボヘミアの農村部に生まれていた沢山の小都市を中心に展開した地方市場を支配していたのは、国王よりも、チェコ人貴族領主たちでし

た。ボヘミアの富は、この貴族たちを通して、初めて国王の手に集められた、ともいえましょう。

こうしたチェコ人貴族たちに対抗して王権を強化・拡大する道は、ドイツ皇帝として、ローマ教皇との関係を緊密にし、またドイツ諸侯ばかりでなく、ヨーロッパの諸王家とも協調しなければなりません。王国内においては、ようやく展開してきた地方市場、商品流通市場をボヘミア貴族の手から王権のもとに奪い返さねばならないわけです。そうしなければ、小商品生産者に成長しようとする農民をさえ支配できなくなるといえます。

教皇との関係でいえば、その結果は、王国内における教会領の増大となり、高位聖職者の国王による任命権を使って、主としてドイツ人聖職者の増大をもたらすことになりました。それは、ひいてはチェコ人貴族領主の犠牲において実現できるものでした。皇帝カールⅣ世の時代の終りには、教会領はボヘミアの大地の $\frac{1}{3}$ を越えたともいわれています。

ドイツ諸侯や諸王家に対しては家門政策、いわゆる結婚政策を採っています。結婚政策は何もハプスブルク家だけのものではありません。たとえばイギリス王リチャードⅡ世の王妃クイーン・アンは、カレルⅠ世の娘であり、また当時のハプスブルク家のルードルフⅣ世建設公の公妃カタリーナもカレルの娘です。その弟アルプレヒトⅢ世公も、ルクセンブルク家の王女エリザベータを公妃に迎え、このアルベルティン系から、わずかな期間、1437~57年までボヘミア王を出して、16世紀、1526年以來、ハプスブルク家のボヘミア支配へと引き継ぐ大きな要因となりました。

ことにドイツ諸侯への対応は、一方でルクセンブルクの家領を拡大し、シュレージェン・ラウジッツなどをボヘミア王国に加えたばかりでなく、ブランデンブルクをも皇帝領として購入しています。しかし他方では、拡大した家領を維持するためにも、1356年、周知の金印勅書によって、帝国における七選帝侯による皇帝選出を認め、これらの選帝侯領に實質上の帝国からの独立という特権を与えることになりました。付け加えるまでもないと思いますが、マインツ大司教を筆頭にケルン・トゥリエルの両大司教の3人の聖職諸侯、4人の世俗諸侯ではボヘミア王・ファルツ宮中伯・ザクセン侯・ブランデンブルク辺境伯ですから、直接にはルクセンブルク家に皇帝位を確保する

意図がはっきりしています。

だからこそ、カレルI世の婿であるにもかかわらず、ハプスブルク家のルードルフIV世公には選帝侯の地位が与えられなかったのでしょう。そのころのハプスブルク家の立場については、ヴァンドルツカの『ハプスブルク家』に詳しいので、ここでは割愛しますが、ルードルフIV世も、カールIV世に対抗して、ウィーンに聖シュテファン寺院を建てたり、1365年にはウィーン大学を創設したりしています。だからこそ建設公とも呼ばれているわけです。しかしそれでもウィーン建設は、今のリンク＝シュトラーク内の狭い旧市内だけに限られていました。

それにもまして重要な点は、1356年の金印勅書で、七選帝侯から排除されると、ルードルフIV世は、公位についた1358年の冬の間に、いわゆる「大特許状」を偽造してまで自ら「大公」を称し、既成事実として大公領に選帝侯領を凌ぐ特権を手に入れようとしたことです。これが約一世紀後ハプスブルク家のフリードリヒIII世が皇帝に選出され、皇帝として、この偽の「大特許状」を認めた時、効力をもつ帝国法ともハプスブルクの家内法ともみなされることになってしまいます。皇帝選挙に際して選挙権を持たないハプスブルク家＝オーストリア大公家にとって、選挙権のあるボヘミア王位の獲得は不可欠の重要性をもつことにもなったわけです。まことに奇妙なことですが、選帝侯領の一つである「ボヘミア王国」は、王国内のことについては、帝国法の干渉を受けないことにもなります。特権をもったボヘミア貴族たちは、高位聖職者とともに、いわゆる身分制議會を構成しますが、ここには都市の代表は入れませんでした。

たしかに帝国や王国の行政機構の職、そしてカレル自身の宮廷職につく宮廷貴族のなかには、沢山の外国人、とくにドイツ人の数が多くなっていきました。チェコ人のボヘミア高級貴族も多かったといえます。公用語にあっても、ラテン語のほかに、このころから一方でチェコ語が使われるとともに、他方ではドイツ語、といってもまだ中高ドイツ語ですが、これも公用語として整序されてきています。カレル自身もラテン語・フランス語・イタリア語、もちろんドイツ語・チェコ語と沢山の言葉を話すことのできる国際人であっただけに、この宮廷には、沢山の人文主義者たちが、ヨーロッパの各地から

集り、国際色豊かなコスモポリタンの雰囲気には溢れていたことは容易に想像できます。しかしそれは何故でしょう。

カレルの遠大な「都市計画」によるプラハの建設は始まってはいましたが、市壁に囲まれた市街地といっても、なおそのなかには農地や放牧地にブド一畠などもあって、むしろ農村的であったとさえいえましょう。私の手もとにある一番古い図版は1493年とされていますが、その時でもフラチャニ城のほかは、スタレー・ムニェストの広場でも、その回りに教会と家が建ち並んでいるにすぎません。しかしそれが1652年の図版によりますと、もう沢山の尖塔と赤い屋根でビッシリ埋ってしまいます。

たしかにプラハはヴルタヴァ川の水脈を利用して、古くからいわゆる遠隔地交易の中心の一つであり、10世紀のアラブ＝ユダヤ商人イブラヒム・イブン・ヤクブの証言にもあるように、北方の国のなかでも一番繁栄していた町だったわけですが、14世紀にもなると、先にも述べましたように、農村部に展開してきた地方市場を相互に結びつける中心的な結節点としての性格を強く打ち出してきたのではないのでしょうか。それとともに、ヴルタヴァ川の河川敷でもあったスタレー・ムニェストの北の部分に閉じ込められたゲットーのユダヤ人を除いては、東方からの商人たちは、西方から進出してきたドイツ人商人たちにすっかり追い出され、いわばプラハの都市貴族層はドイツ人に独占されてしまいます。チェコ人たちは、その支配下に、わずかに小商業あるいは手工業を営むだけになったのではないのでしょうか。

こうしたドイツ人大商人・都市貴族層はギルドを組織し、王権の庇護のもとに、いろいろの特権を与えられています。しかし西南ドイツの帝国都市や北方のハンザ都市のような自治都市にまでには到達していません。

神聖ローマ帝国の首都ということでの繁栄とはいうものの、その繁栄の根底では、大きな変化、封建社会を揺がすような構造的転換が始まっていたといえます。たとえばプラハの都市貴族たち大商人も、なお当時、農村部に簇生してきた地方小都市を十分に支配できるまでにはいっていませんでした。

またことにドイツとの国境地帯では、開墾が進むにつれて農民の不足が見られ、チェコ人貴族たちも、むしろ積極的にドイツ農民の入植を受入れてい

ます。このいわゆる「ドイツ人の東方植民」は、チェコの歴史家グラウスによっても、ドイツ農民の侵入ではなくて、浸透であったといわれ、この植民、開墾のためにも、「ドイツ人の権利」と呼ばれる「土地を自由に処分し得る可能性をもった永小作権」が導入されました。こうした新しい、より自由な農民と貴族領主との関係を基盤に地方市場が形成され、この貴族領主の主導のもとに、小さな市場町や地方農村小都市が生まれたといえます。地方にあるボヘミア貴族が、この地方小都市を実際には支配していたわけですから、地方のボヘミア貴族とプラハのドイツ人都市貴族とが鋭く対立することになります。市壁のなかに、まだまだ農村的景観を残している1493年のプラハの図版はそんなことを私に想像させるのです。

ヴラスト・チハーコヴァーさんが『プラハ幻景』のなかに「飢えの壁」について書いています。ちょっと長くなりますが、興味深いので引用させていただきます。

1340年は穀物の収穫が非常に悪く、物価が高くなり、プラハの貧しい人びとは食べるものにたいへん苦勞していたという。ある日、2000人にもおよぶ人々がフラチャニ城の教会の広場に集り、ミサを終えて出てきた当時の王カレルIV世に跪き助けを求めた。彼らは飢え死からのがれるため、仕事の報酬として、お金ではなく食糧を望んだ。王には、2000人もの人に与える仕事はなかったが、心から同情し、なんとか彼らを助けたいと考えた。翌日、王の部下は2000人の群衆をペトシーン山に連れて、そこで何の目的もない壁をつくるように彼らに命じたのである。その仕事と引き換えに、人々には食料、衣服、靴などが与えられたという。

壁の建設は二、三年つづいた。そのうわさを耳にした地方の人々までかけつけ、作業も分担されていった。王はしばしば馬に乗って工事現場に姿を現し、作業する人々を“自分の家族”と呼んだ。壁ができあがると、丈夫な歯をもつ人間の口のような形になり、それはパンを与えてくれた王に対する“家族”の感謝を表す記念碑となった。現在ペトシーン山には、この壁にそってケーブル・カーがうごいているが、「飢えの壁」は何の役にもたないのにいまだに壊されることなく、プラハの人たちの意志によって残されている。

チハーコヴァーさんによれば、このケーブル・カーは歴史のなかで二度ほど停止されたが、現在は動いているという。このペトシーン山、むしろ丘ですが、この壁はマラー・ストラナの南限を画する市壁でした。市壁は1493年の図版では、ただ灌木地帯を貫いて、いかにも「何の役にもたない」ように見えます。私たちが20年前このあたりを歩いたことがありますが、当時はケーブル・カーの線路は、ツタやシダなどの下草に覆われていて、壁も苔むして、チェコ人にとってそんなに由緒ある壁とは、ついぞ思いませんでした。このお話は、むしろカレルⅣ世にまつわる伝承にすぎないのかもしれませんが。

しかし、先にちょっと触れましたフランチシェク・グラウスも、「封建的危機論争」が国際的に拮った時、チェコスロバキアの歴史家を代表して参加しています。そのなかで、ボヘミアにおける封建的危機に関して、イギリスではこの危機が事実封建制の崩壊となるが、ボヘミアでは再版農奴制に結果する。したがって危機を崩壊におきかえることはできず、単に危機現象として、しかもその第1局面として考察すべきことだとしています。

この分析のなかで、グラウスは、私なりに整理すれば、3つの論点を挙げていますが、その1つに貨幣の悪鑄を取り上げています。本来国王の特権であった貨幣鑄造権の濫用、とくに悪鑄は、国王にとって「両刃の剣」であって、貨幣の悪鑄によって巨利を博するが、同時に物価騰貴によって貨幣収入を失うこととなります。たしかにカレルⅠ世の時代までは、クトナー＝ホラばかりでなくイフラヴァなどの銀に支えられて、ペーメン・グロシェンあるいはプラーガー・グロシェンと呼ばれたボヘミアの銀貨は、質も良く、量も豊富であったために、外国にあっても信用のおける、人気のある支払手段として通用していました。

カレルⅠ世が、皇帝カールⅣ世となり、プラハがドイツ帝国、さらにはヨーロッパ経済の中心となるにつれ、遠隔地交易や教皇庁への支払手段であった金貨の需要が増えた割には、金貨の供給が少なく、ボヘミアの銀貨との格差が開いてきました。たしかにボヘミアでは金鉱は少なく銀だけは豊富だったのですが、金はもっぱら今のスロヴァキア、当時はハンガリーで採鉱され、フォリント金貨としてボヘミアでも流通していました。しかし、このフォリ

ントよりも、ライン・グルデンの方がより国際的、というよりも汎ヨーロッパ的であったのかもしれませんが。この金貨、ライン・グルデンも1356年を100とすると、1402年では、まだ重量で97.4%、金の含有量でも93.3%にまでしか減価していませんが、1425年になると、重量では96.0%を維持していますが、金の含有量では77.9%にまで下落しています。

農村部で社会的分業が展開してきますと、たしかに貨幣、とくに、ここでは銀貨ベーメン・グロシェンの需要が増大します。しかしプラハが、帝国の中心となり、いわば当時の世界経済の中心的役割を果たすことにもなりますと、どうしても、こうした、いわば銀貨を主とした地方市場から銀貨が引上げられ、金貨と交換されるようになるのではないのでしょうか。そうするとますます地方市場における貨幣不足から銀の生産が立ちおくれ、銀貨の不足から、国王も、事実として鑄造権を獲得した地方貴族も、結局は銀貨の悪鑄に走ることとなります。事実、グラウスによれば、1300年を100としておよそ1400年ごろまでに、ベーメン・グロウエンは重量で51.9、銀の含有量では34.5まで下がります。これに対して1ハンガリー・グルデン、フォリント当りのグロシェンは、14世紀の第1四半期には12~13グロシェンであったものが第2四半期に16~17グロシェンにまで下がりますが、第3四半期、カレルI世の治世に、一度12~13グロシェンまで回復しますが、第4四半期が終るころまでに再び徐々に下り始めます。15世紀に入ると、20グロシェンを越えて急速に下落してしまいます。

各地方毎に分散し、いわばこうした地方市場の中心であった小農村都市にあっては、人口増も限られ、貨幣価値の減価に伴って、とくに穀物価格が騰貴しますが、それに応じて封建制の弛んだ農村部では、穀物生産を拡大しますが、小都市の需要を越えて供給が過剰になり、穀物価格の下落さえみられるようです。しかも、こうした市場で日常生活に関わる通貨はグロシェンよりも、さらにその下の小貨幣・補助貨幣が一般に流通しているので、その下落率はグロシェンより激しかったといわれます。封建地代が金納化しているとすれば、農民の生産する穀物の商品化率が高ければ高いほど、穀物価格も下落しますが、反面農民は穀物生産を避けて、その他の商品作物、たとえば羊毛とか麻とか採油植物などへ、生産を転換し、さらには萌芽的に農村工業

にさえ転換する可能性も生まれましょう。

その際、共同体規制、とくに作付け制限の強い三圃制村落のなかで、一般には大農とされる完全農民は、却って穀物生産からの離脱が難しく、むしろ三圃制の枠外にあるゲルトナーとか貧農層のなかから、穀物以外の商品生産を営む者が現れ、ここに新しい富裕な農民層が形成されることも多くみられます。こうして三圃制村落体制が、次第に崩れていく過程で、一方ではこうした新しい富裕な農民層を中心に農村共同体、いわば隣人共同体に再編されますが、他方ではこの再編された共同体から排除され、土地を失い、こうした村落から離れざるを得ない人びとをも大量に創り出すのではないのでしょうか。ことに小農村都市にも、商工業部門でいわゆるギルド規制が、地方貴族によって認められるようになると、手工業部門と農業との間の鉅状価格差もあって、穀物などの第一次産品を除く諸物価の高騰に結果するでしょう。この被害は貧困者ほど大きくなります。そして、こうした貧困者は、再編された農村共同体から、換言すれば自らの生産手段から切り離されて、ボヘミア王国のなかで、浮浪し、傭兵に応募する人びとを別にすれば、結局は就業の可能性の多い首都ブラハなど、当時の大都市へと流入することになります。

14世紀の初めには1万人にも達しなかったブラハは、14世紀末までに5万の人口にまで増えたともいわれていますが、もしそうだとすれば、カレルの宮廷をめぐる穀物など生活必需品の需要を含めて、ブラハに集った人びとの需要に見合う供給が不足することは、目にみえます。まして当時の運搬手段の状況を考えれば、地方小都市のように穀物価格の低下傾向を想定することはできません。穀物価格も相対的に高騰し、それにも増して諸物価の騰貴もひどくなります。まして1340年の穀物の不作という事情があれば、こうした傾向をますます増幅することになりましょう。グlausも、「物価騰貴についての同時代人の歎きは深かった。ことにカレルI世のもとでの40年間に手工業製品は2倍になった」と述べています。こうしたブラハの事情を考えれば、チハーコヴァーさんのいう「歎きの壁」の伝承も、まったく史実から離れたものとはいえなくなります。

ただカレルI世のブラハでは、いってみれば今日の都市開発プロジェクトのように、ブラハの都市建設事業が、流入した大量の貧困者に食糧や衣類、

靴などを現物で支給し、いわばグロシェンの下落を防いだ、その結果が先に述べましたようなグルデン当りのグロシェンの価値の回復にも役立ったのではないのでしょうか。まだプラハの繁栄は、経済の危機的状況を回避できるだけの、いわばゆとりをもっていた、ともいえましょう。しかしその反面では、この繁栄も持続できるほどのものではなかった、ということもまた事実であったわけです。この破局の第一の局面は、15世紀に入ると、はっきりと現れてきます。それこそが、フスの焚刑と、それを契機とするフス派の人びとの蜂起、いわゆるフス戦争に象徴される「封建的危機」の局面であったといえます。しかもドイツに始まったとされる宗教改革に一世紀も先立って、このボヘミアに、民族問題をも含めて起っていることは、私にとって大変興味深いことなのです。

このフス戦争については、また別の機会に譲ることにしますが、私事になりますが、学部に入って最初にドイツ中世史を教えていただいた山中謙二先生の本当の御専門が、『フシーテン運動の研究』であったことを、その当時は、まったく知らなかったのに、今ごろになって、私が、それと取り組むことになろうとは思いませんでした。

要するに私のいいかかったことは、「黄金のプラハ」といわれる繁栄、封建社会の最後の繁栄の陰には、早くも、次の時代への胎動が始まっていたということであり、しかも当時のいわば大都市の周辺にある農村部で、たとえ分散的ではあれ、銀を通貨とする地方市場が形成され、金を主とした商品流通市場とは違った形で、いわば労働市場ともいべき萌芽が生まれていた、といいたかったわけです。社会的分業の展開につれて、共同体も再編され、市場が形成されても、この市場が、決して均質のものではなく、異質の市場が重層的に重なり合いながら、しかも互に接点をもっていた。こうしたなかから新しい、いわゆる「近代」が胎動していくように思います。

まとまりのない話でしたが、御清聴ありがとうございました。